



食と命と若者の確かな感覚

「食べものさん、ありがとう。作ってくれた〇〇さんありがとう」長野県伊那市高遠町にある不登校や山村留学の子どもたちの受入れ施設であるフリーキッズ・ヴィレッジでは、食前にこう唱えて手を合わせる。米、野菜、魚等、人間は命あるものをいただいてはじめて自らの命を長らえることができる。その命を与えてくれたものに、そしてこれを調理してくれた〇〇さんに感謝する。朝夕の食事前には「子ども勤行」も行われ、「今日も一日、ありがとう」「今日も反省、ごめんなさい」とへ夕の祈りへをささげる▼こうしたフリーキッズの活動に、えらく感心させられたが、別途、都内の日本料理店で板前修業中である二〇代の女性Kさんにお会いしての話である。これまでの仕事から一転して食の仕事に飛び込んだが、その理由をKさんは「食の仕事をつうじて、食べる人に命について考えるきっかけを与えたい」と語る。その背景には、「現代は人間が人間中心の勝手な振舞いをして命をあまりに粗末に扱いつぎている」ことへの「心の痛み」が横たわる▼あわせて「本当においしいものを食べると人は素直になれる。そしておいしい、で人はつながることができる。人間は共感を求める生き物であり、食をつうじて人は幸せになれる。そうした食を提供する飲食業はコミュニティ産業でもある」との話にも大きく心を揺さぶられた。田園回帰現象にとどまらず、一部とはいえ、若い人たちの間に確かな生き方への意識が芽生えつつある場面に出くわす機会が増えた。力を発揮する場の提供と応援が必要だ。

(土着菌)